

比恵59

—比恵遺跡群第116次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1098集

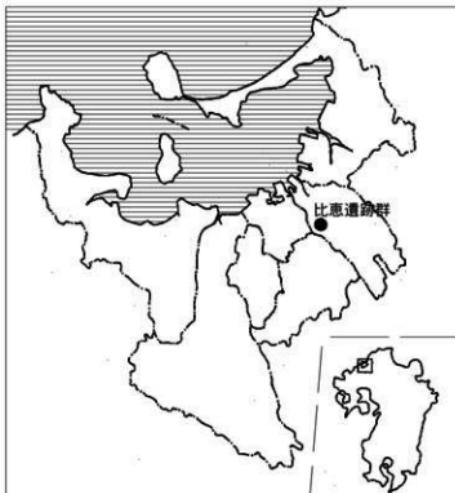
2010

福岡市教育委員会

比恵 59

—比恵遺跡群第116次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1098集



調査番号 0822
遺跡略号 HIE-116

2010

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄してきました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。

比恵遺跡群は奴国の拠点集落の一つとして全国的に著名な遺跡です。当遺跡が所在する博多駅南地区は博多駅近辺のオフィス街・住宅街として発展し、それに伴う開発がさかんに行われている地区です。本市教育委員会では、それらの開発については、事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、事務所ビル建設に先立って、平成20年度に実施した比恵遺跡群第116次調査の成果を報告するものです。調査では弥生時代の集落跡を検出しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、ご協力をいただきました株式会社つちやをはじめとした、関係各位に対して、厚く感謝の意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山 田 裕 嗣

凡 例

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が民間の事務所建設に伴い、福岡市博多区博多駅南4丁目180番4で平成20(2008)年度に調査を実施した比恵遺跡群第116次調査の報告書である。
- (2) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は山崎龍雄が担当して行った。
- (3) 遺構・遺物の実測と写真撮影は山崎が行った。
- (4) 本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
- (5) 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ}18'$ 西偏する。
- (6) 本書Fig.1の調査区位置図は平成5年3月作成の『福岡市文化財分布地図 中・南部』を使用した。
- (7) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (8) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (9) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

調査基本情報

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	116次	調査略号	HIE- 116
調査番号	0 8 2 2	分布地図図幅名	No.37東光寺	遺跡登録番号	0 1 2 7
申請面積	662.86m ²	調査対象面積	330.00m ²	調査面積	327.00m ²
調査期間	平成20(2008)年7月7日~7月31日			事前審査番号	20- 2- 162
調査地	福岡市博多区博多駅南4丁目180番4				

本文目次

第1章 はじめに.....	3
1 調査に至る経緯	3
2 調査の組織	3
第2章 遺跡の立地と歴史的環境.....	4
1 遺跡の立地と歴史的環境	4
第3章 調査の記録.....	6
1 調査の概要	6
2 遺構と遺物	6
①溝状遺構	6
②土坑	6
③ピット	11
④他の遺構・包含層	11
3 まとめ	14

挿図目次

Fig. 1 第116次調査区位置図 (1/6,000)	2
Fig. 2 比恵遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)	5
Fig. 3 遺構全体図 (1/100)	7
Fig. 4 調査区西壁土層 (1/60)	8
Fig. 5 SD10土層 (1/40)	8
Fig. 6 SK02・07・SX04 (1/40・1/60)	9
Fig. 7 SD10、SK02・07出土遺物 (1/3)	10
Fig. 8 SK07出土遺物 2 (1/3)	11
Fig. 9 各遺構出土遺物 1 (1/3・1/2)	12
Fig. 10 各遺構出土遺物 2 (1/2・1/1)	13
Fig. 11 調査区周辺地形図 (1/400)	14

図版目次

図版扉 調査作業風景	15
PL.1 (1) 第116次調査区（南西から） (2) 第1区全景（北西から）	17
PL.2 (1) 第2区全景（北西から） (2) SD10（西から）	18
PL.3 (1) SK02（北西から） (2) SX04（北西から）	19
PL.4 (1) SK07（北から） (2) 同 完掘状況（東から）	20
PL.5 (1) SK07遺物出土状況（西から） (2) SX09（南東から） (3) SX03谷部西壁土層（北東から）	21
PL.6 各遺構出土遺物（縮尺不統一）	22

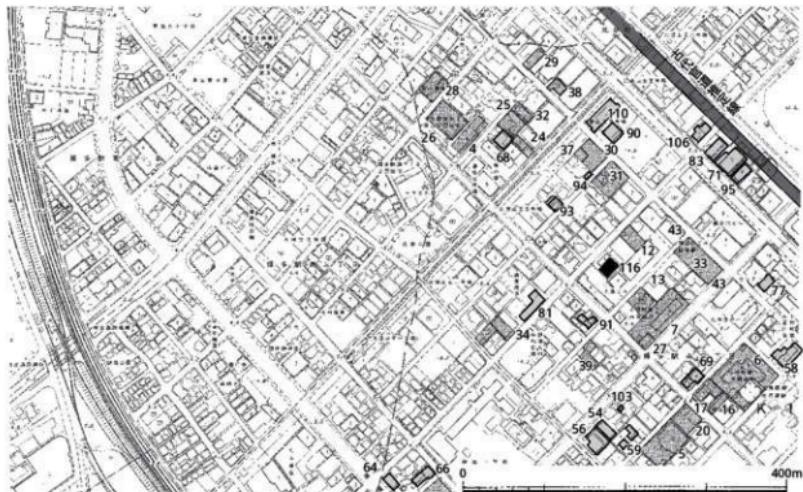


Fig.1 第116次調査区位置図(1/6,000)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成20(2008)年5月29日付けで株式会社つちやより、福岡市博多区博多駅南4丁目180番4における事務所ビル建設の為の、埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号20- 2- 162）が福岡市教育委員会に申請された。申請地は比恵遺跡群の遺跡範囲内に立地するため、平成20年6月10日に事前試掘調査を実施して遺跡の有無を確認した。試掘調査の結果、遺跡の存在が確認されたため、申請者側とその保存について協議を行ったが、計画の変更是困難であるということから、調査費用や調査事務所などの準備は原因者負担で、記録保存のための調査を行う事となった。調査対象範囲は計画工事範囲である。本調査は平成20年7月7日から開始し、7月31日迄行った。調査実施面積は申請面積662.86m²中の327.00m²である。調査報告書作成作業は平成21年度に実施した。

調査にあたっては、申請者の株式会社つちや及び工事関係者の方々に多大な協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

2. 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査委託	株式会社つちや代表取締役 重松チエ子
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課長 田中寿夫 同課 調査第1係長 杉山富雄
調査庶務	文化財管理課管理係 古賀とも子
調査担当	埋蔵文化財第2課主任文化財主事 山崎龍雄
調査作業	浅井伸一 井上正通 櫻田信一 栗木昭孝 近藤由美 真田弘二 茂末加世子 土橋一則 徳永洋二郎 中村秀策 西野光子 水田正敏 水田ミヨ子 森下初美 森弘品子
整理作業	木藤直子

第2章 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig.2)

立地と自然環境 比恵遺跡群が所在する福岡平野は、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は犬鳴・三郡山地に画された地域で、周辺の山地から派生して博多湾に注ぐ室見川・樋井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や諸岡台地・糟屋台地などの丘陵・台地部とによって構成される平野である。この平野はまた地域的に西から良平野・福岡平野・糟屋平野とに細分される。ここで言う福岡平野は那珂川と御笠川、月隈丘陵に囲まれた部分をさす。

比恵遺跡群は、この狭義の福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた標高5~11mを測る平坦な中位段丘上に立地する遺跡である。この台地は阿蘇山起源のASO-4火砕流によって形成されたものである。ただ現在見られる平坦な地形は昭和10年代に行われた区画整理によって削平された結果であり、本来は台地を開析する小河川が入り組んだ台地という景観を呈していたものと思われる。今回報告する第116次調査区は比恵遺跡群中央部やや北により位置し、試掘の成果から南側に浅い谷が入る地形であることが推測されていた。

歴史的環境 比恵遺跡群は南側に続く那珂遺跡群と共に、北部九州を代表する弥生時代集落で、奴国を中心とした一つである。比恵・那珂遺跡群は本来一体化してもよい遺跡群であり、両遺跡群を合わせた規模は東西最大幅約1km、南北最大長2.5km、総面積約100ha以上を測り（註1）広大な規模を誇る。また遺跡群は、土地区画整理事業に伴って1934~35年に、鏡山猛氏らによって最初の調査が行われるなど、学史的にも著名な遺跡である。遺跡としては旧石器時代から中世迄の複合遺跡であるが、遺跡群が大きく発展するのは弥生時代からである。弥生時代初めから集落が出現するが、その範囲は遺跡の北側から西側にかけてである。弥生時代中期頃からは遺構が段丘全体に広がり、中期後半以降、直線的な大溝により主要部分が区画され、後期初頭には遺跡中央部の第1次・第10次調査区に首長層の居住区と思われる方形環濠が出現する。墳墓は北側の第4次調査区や第2次・第6次調査区などで櫛棺墓地が確認されている。特に第2次・第6次調査区では中期の墳丘墓や櫛棺墓、木棺墓などが検出され、櫛棺内には細形銅剣が副葬されていた。後期末から古墳時代前期にかけては那珂・比恵遺跡を南北に貫く並列する二列の溝が確認されている。この溝は道路状遺構と考えられており、この遺構に沿って、居住地区と墳墓地区が区画されている。古墳時代は南側に隣接する那珂遺跡群では前期古墳の那珂八幡古墳や後期の刻塚古墳など大型の前方後円墳が遺存しており、比恵遺跡群内でも第6次・第36次調査区で古墳の周溝などが調査されている。古代は、遺跡の北側一帯に検出されている大型建物遺構群は、『日本書記』にある「那津官家」との関連が考えられ、その重要性から平成13年に国史跡に指定されている。遺跡群の東側には大宰府から延びる古代の西海道の道路跡なども検出されている。

註1 久住猛雄「最古の都市那珂・比恵遺跡群」『古代の福岡』2009 海鳥社



- | | | | |
|------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 博多遺跡群 | 8. 板付遺跡 | 15. 須玖永田遺跡 | 22. 井田C遺跡 |
| 2. 堅粕遺跡 | 9. 諸岡遺跡 | 16. 須玖岡本遺跡 | 23. 麦野A遺跡 |
| 3. 稲崎遺跡 | 10. 雀居遺跡 | 17. 須玖四丁目遺跡 | 24. 麦野B遺跡 |
| 4. 吉塙遺跡群 | 11. 五十川遺跡 | 18. 赤井手遺跡 | 25. 南八幡遺跡 |
| 5. 比恵遺跡群 | 12. 井尻遺跡 | 19. 三宅廃寺 | 26. 錦鏡隈遺跡 |
| 6. 那珂君休遺跡 | 13. 白佐遺跡 | 20. 野多目遺跡 | |
| 7. 那珂君休遺跡群 | 14. 須玖唐梨遺跡群 | 21. 野多目拓渡遺跡 | |

Fig. 2 比恵遺跡群と周辺の遺跡 (1/25,000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig.1・3・4, PL.1・2)

本調査区は比恵遺跡群の北側に位置する。調査区一帯は開発に伴って調査が比較的行われている地域で、周辺の調査区としては東側に第12次調査区、南側に第13次調査区、南西側に第91次調査区などがある。周辺の各調査区では弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物などを検出している。

調査は廃土の場内処理の関係から、調査区を東西2分割して行った。調査地は駐車場になっていたため、まずアスファルトの除去とそれの場外持ち出しから始めた。遺構面は客土による盛土造成を受けているためか、深さは浅い所で地表下1m、深い所では2mを測り、北から南側へ傾斜している。遺構面の標高は高所部で5m、低地部で4.2mを測る。遺構面までの堆積状況は上から、厚さ最大1.2m程の客土、水田耕作土、床土、褐色から暗褐色粘土、黒褐色粘土、黒色粘土、遺構面にぶい橙色ローム(7.5YR6/4)で、この面は低地部では淡黄色(7.5YR8/3)～灰白色(10YR8/2)ローム粘土となる。下部の黒褐色粘土と黒色粘土は弥生土器を多く含む。遺構は北側高所部は削平を受けたためか少なく、主に南側傾斜面で検出した。主な検出遺構は溝状遺構2条、土坑2基、ピット、近世以降の護岸状遺構などである。遺構の時期としては弥生時代中期初め頃から奈良時代頃迄である。出土遺物もその時期のものである。出土の量としてはそれほど多くない。

2. 遺構と遺物

① 溝状遺構 (SD)

SD10・11と2条検出した。SD11はSD10に切られ、規模も浅く小さいので、SD10について報告する。

SD10 (Fig.5・7, PL.2)

調査区北側で検出した東西方向の小溝。確認規模は長さ5.5m、幅0.6m前後、深さ0.3mを測る。溝断面形は逆台形を呈す。底面は浅いピット状の窪みが多く入り、凹凸が激しい。溝埋土は黒褐色粘土で下層には明褐色地山ロームブロックを混入する。

出土遺物 弥生土器から古墳時代以降の土器類、古代の須恵器、黒曜石剝片などが出土したが、量は少なく、大半が細片で図示しうるものは少ない。1・2は須恵器。1は蓋の口縁部片。復元口径15.8cmを測る。調整は回転ヨコナデ。色調は外面褐灰色を呈し、胎土は1mm内外の砂粒多く混入。2は高台が付く环の底部片。復元高台径10.6cmを測る。調整は回転ヨコナデ、高台内はナデ。色調は灰白色を呈し、胎土は精良。

② 土坑 (SK)

SK02 (Fig.6・7, PL.3)

調査区南壁で検出した土坑状の遺構。台地落込みの一部の可能性もあるが、壁面の形状などから土坑とした。確認規模は長軸長3.2m以上、深さ0.35mを測る。埋土は軟質な黒色シルト質粘土である。湧水がある。

出土遺物 弥生時代前期後半の土器が少量出土している。3・4は壺口縁部細片。3は口縁部が外反し、外面頸部の境に段を有す。調整はヘラミガキ。板付II式段階か。4は口縁が肥厚し、内面に段を有す形態。外面頸部の境に沈線が巡る。摩滅がひどく調整は不明。5・6は口縁部が外反し、如意形

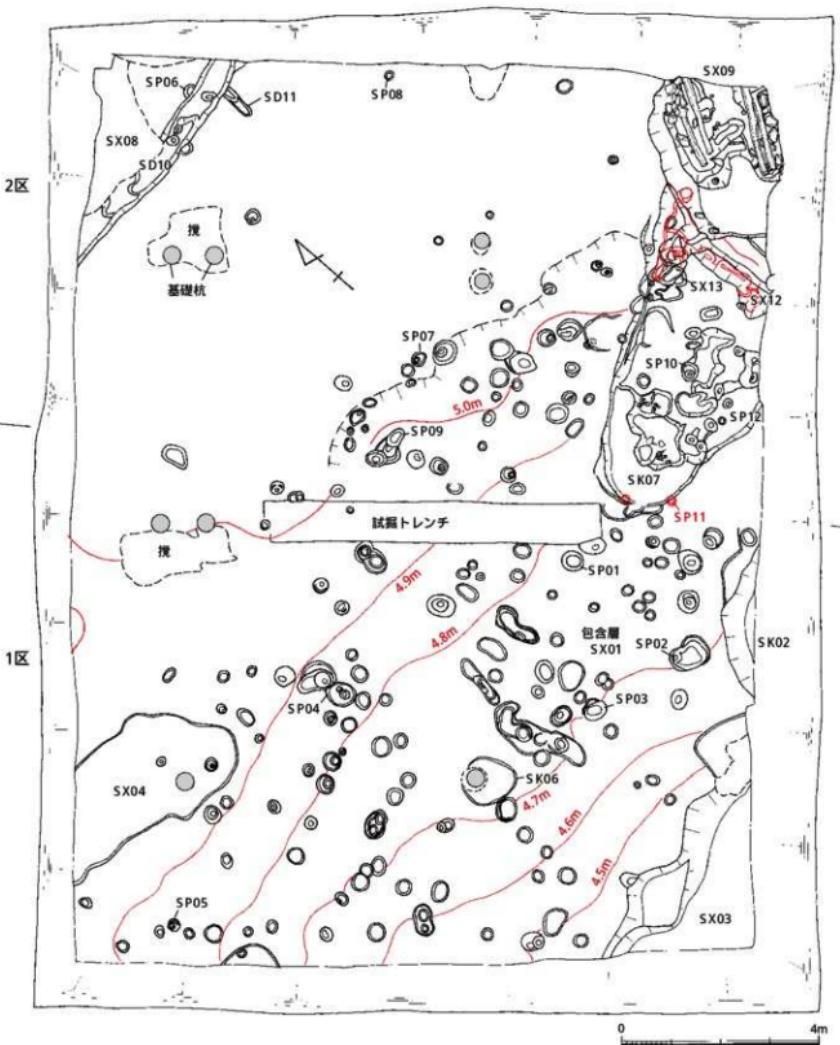


Fig.3 遺構全体図 (1/100)

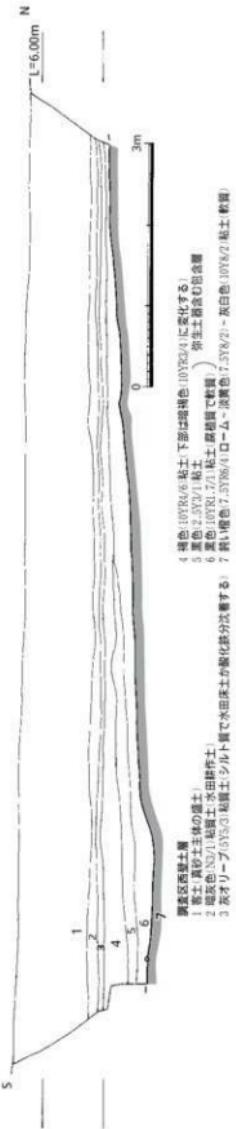


Fig.4 調査区西壁土層 (1/60)

に開く甕の細片。いずれも口唇部に5は棒状工具、6はヘラ状工具による刻目が入る。調整は内外面ハケ目。7は壺と思われる底部片。復元底径8.9cmを測る。内底表面は剥落するが、調整はナデ。色調は、3・4はぶい橙色、5は橙色、6・7は鈍い褐色を呈す。6の焼成はやや不良。7は胎土に1~2mm砂粒を多く含む。

SK06 調査区西側中央部で検出した不整円形を呈する土坑。北端はコンクリート杭が入る。長軸長1.1m、短軸幅1.02m、最大深さ5cmを測る。埋土は黒色粘土。遺物は弥生土器細片2点出土。

SK07 (Fig.6~8・10, PL.4~6)

2区南側、低地部包含層で検出した平面形が舌状を呈する土坑。東側をSX09に切られる。確認規模は長軸長6.5m以上、短軸幅3m、深さは0.2~0.3mを測る。床面はほぼ水平であるが、凹凸が激しい。当初住居跡のような性格を考えたが、地床炉跡や柱穴がなく、土坑とした。埋土は上下2層に分離出来た。上層は黒褐色粘土、下層は黒色粘土で鈍い褐色ロームブロックを多く混入している。

出土遺物 弥生時代中期から古墳時代初め頃の土器と叩石や焼石が出土した。出土量は比較的多い。8は口縁部を欠損する二重口縁の壺である。胴部は下膨れで底部は欠損するがやや尖り気味と思われる。頸部に一条の突帯が付き、その下に直径2mm程の竹管文が一列巡る。調整は全体的に摩滅がひどく不明であるが、外面は赤色顔料が部分的に残る。胴部内面は粗いヨコハケ目。色調は鈍い褐色を呈し、胎土に1~2mm白色砂粒を多く含む。古墳時代初め頃のもの。9~20は甕。9は弥生時代後期後半~末頃の口縁が「く」字状に開く小型甕。復元口径14.8cmを測る。器表は摩滅し調整は不明。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は1~2mm砂粒を多く含む。10~15は中期中頃の鐫先状または逆L字状を呈す口縁部。10~12は小片。11の調整はナデ。13は口縁部が短く外折し、上面が平坦を呈す形態。復元口径22.8cmを測る。外面は粗いタテハケ目、内面はナデ。色調は浅黄色を呈す。14・15は中型の甕で復元口径

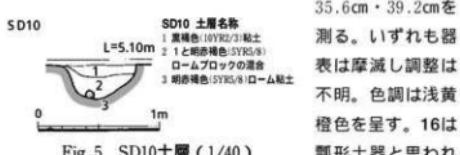


Fig.5 SD10土層 (1/40)

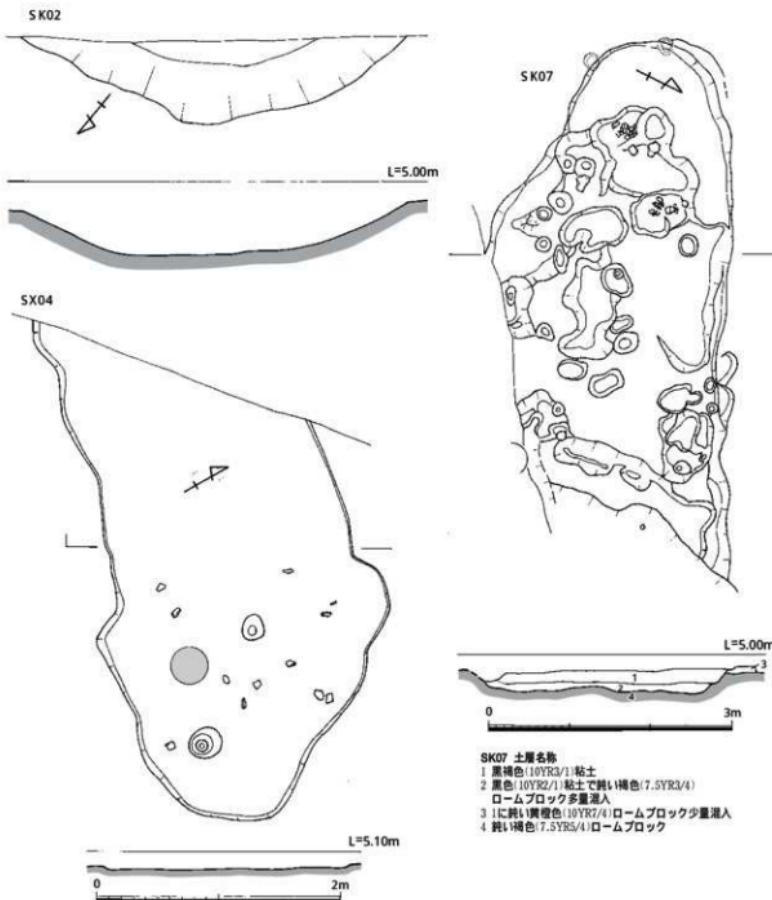


Fig.6 SK02・07・SX04 (1/40・1/60)

る口縁部片。器表は摩滅し調整は不明であるが、内面はヨコハケ目が残る。色調は橙色を呈す。胎土に白色砂粒・赤褐色粒子を多く含み、焼成は不良。17～20は古墳時代初頭頃の大型甕の口縁部と胴部片。17は口縁部で頸部との境に低い三角突帯が付く。18は外反する口縁部で頸部の境に台形状の突帯が付く。19・20は下胴部片で幅広の低い突帯が付く。19の突帯には貝殻腹縁で×状に刻目を入れる。20の突帯は平行タタキを加える。色調は、17・19は鈍い黄橙色、18は淡黄色、20は暗灰色を呈す。17と19は白色砂粒や金雲母・微砂粒などを多く含み、胎土や色調から、同一個体と思われる。

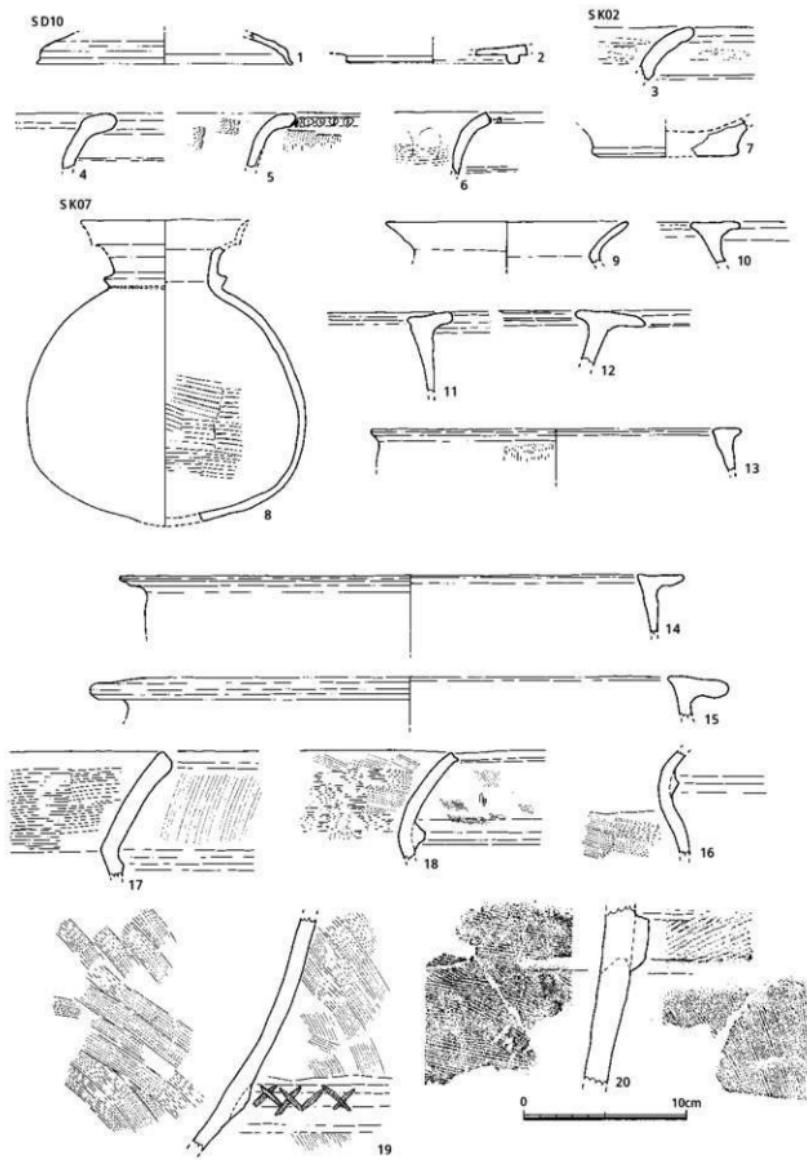


Fig.7 SD10、SK02・07出土遺物 (1/3)

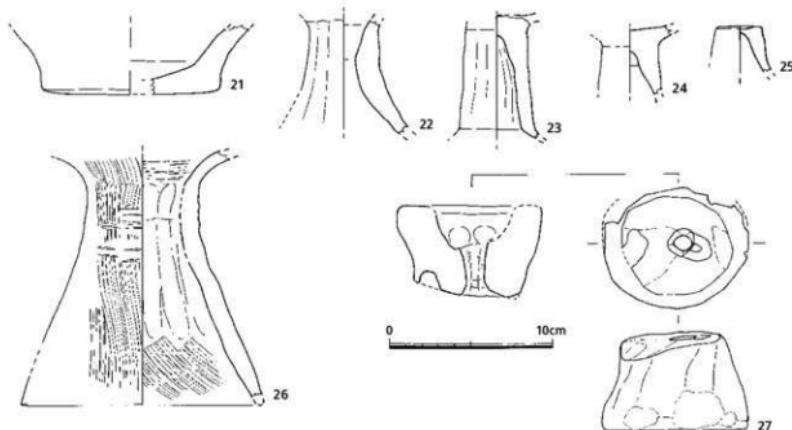


Fig. 8 SK07出土遺物 2 (1/3)

21は壺か甕の底部片。復元底径11.0cmを測る。色調は鈍い橙色を呈す。22～25は高坏脚部小片。いずれも器壁は摩滅がひどく調整は不明。26は弥生時代後期終末頃の器台。口縁部・底部褶は欠損する。復元底径15.0cm、残存高15cmを測る。外面は平行タタキ後粗いタテハケ目、内面は指ナデと粗いハケ目。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は2mm内外砂粒多く含む。焼成は良好。27は支脚。平面形は、梢円形、断面は台形状を呈す。底径8.9cm、最大高6.1cmを測る。頂部に径1.0cmの円孔が開く。器表はやや摩滅するが、調整はナデ。内面指押痕が残る。色調は淡黄色を呈し、胎土に2mm内外白色砂粒多く含む。42は石包丁の未製品か失敗品。扁平な石材で縁辺は雖に打欠いている。残存横長10.4cm、最大幅5.6cm、厚み0.5cmを測る。表面は粒子が浮き出てザラザラしている。43は砥石片。縦長7.3cm、横幅7.7cm、最大厚7.5cmを測る。上面に一部使用面が残る。表面は赤く焼けている。石材は火成岩系。8・12・22・23・25・27・42は上層、9・11・13・17～21・26は中層、10・14・16・24は下層・底面出土。

③ ピット (SP)

1区斜面部分を中心に検出したが数は少ない。全体に深さも浅く、柱穴のように並んで企画性を持ったピットは確認出来なかった。遺物が出土したものも少なく、10基である。埋土は黒色～黒褐色粘質土で地山土ブロックを含むものもある。遺物は細片が多く図示しうるものはなかった。

④ その他の遺構・包含層 (SX)

SX01・03 (Fig.9・10、PL.5・6)

SX01は調査区西～南西側斜面上に堆積した弥生土器片を含む層である。堆積土は黒褐色粘土で、南西側低地では黒褐色粘土の下に黑色粘土が堆積する。この黒色粘土は腐植土質で柔らかく、粘性が強い。流木などを少量含んでいた。また2区の南東隅の低地部をSX03とする。厚さは西側高所部で

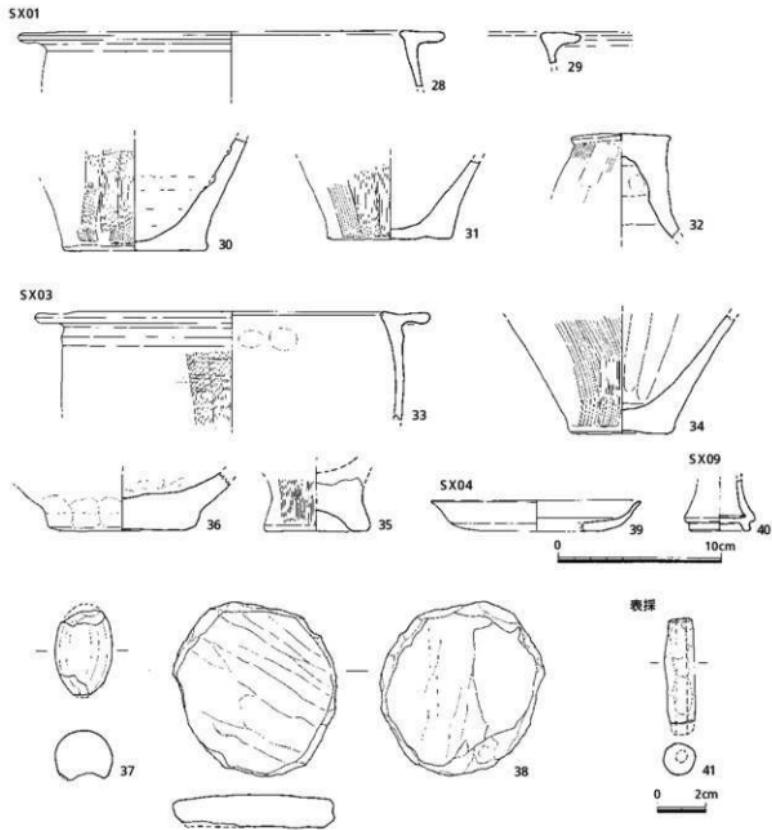


Fig.9 各遺構出土遺物 1 (1/3・1/2)

0.05m、南東隅低地部SX03で0.3~0.5mを測る。

SX01出土遺物 弥生土器の甕などや黒曜石剥片、石鎌、石錐などが出土している。小片が多く、図示しうるものは少ない。上面から混入の近現代遺物が少量出土。28~31は須玖式と思われる弥生土器の甕。28・29は逆L字形の口縁部。28は復元口径26.2cmを測る。29は細片で断面を示す。いずれも器表は摩滅し調整は不明。色調は鈍い橙色~鈍い黄橙色を呈す。28の胎土は精良。30・31は底部。底径9.0cm・7.8cmを測る。いずれも調整はタテハケ目で、30は外底部は平滑なナデ、内面はヨコナデ。色調は、30は暗灰黄褐色、31は鈍い黄橙色を呈す。胎土は30は2mm内外白色砂粒を多く含む。32は支脚。頂部はナデで平滑に仕上げ黒化している。外面はタテハケ目後ナデ。内面はナデで指押え痕が残る。色調は鈍い橙色を呈し、胎土に1~2mm石英・長石砂粒多く含む。44は橢円形状の扁平な石材の四

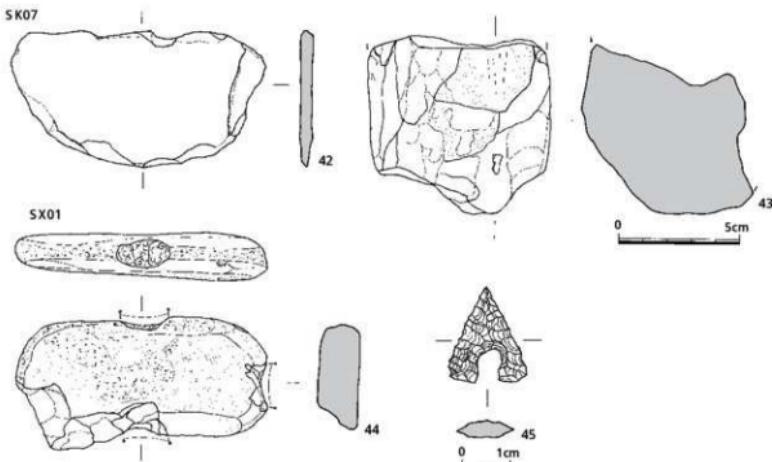


Fig.10 各遺構出土遺物 2 (1/2・1/1)

辺を打欠いた石錘。左上半を欠くが、長軸長10.3cm、短軸幅5.4cm、最大厚1.9cmを測る。表面は敲痕や擦り痕が残る。色調は灰褐色を呈す。石材は砂岩か。45は黒曜石の石鏃。長さ1.95cm、幅1.6cm、厚み0.3cmを測る。表面丁寧な調整を加えている。

SX03出土遺物 弥生時代中期須玖I式の甕や壺、土製品などが出土している。近現代の混入品があった。33・35は甕。33は逆L字形の口縁部、復元口径24.2cmを測る。口縁直下に低い三角突帯が付く。34は底部、底径6.2cmを測る。35は上げ底の底部。いずれも調整は胴部外面ハケ目で、33は口縁部から内面はヨコナデやナデ。34は内面ナデ上げである。35はナデ。色調は、33は純い赤褐色、34は純い褐色、35は純い黄橙色を呈す。胎土はいずれも1~2mm石英などの白色砂粒を多く含む。33・35は金雲母粒子も含む。36は壺の底部片。復元底径9.0cmを測る。調整はナデで内底に指ナデ痕が残る。色調は純い黄色を呈し、胎土に最大3mm内石英・長石砂粒を多く含む。37は投弾で両端を欠損する。残存長3.5cm、直径2.3cmを測る。調整はナデ。色調は純い黄橙色を呈し、胎土は精良。38は土器片利用の円板。直径は7.1×6.8cm、厚み1.2~1.4cmを測る。周縁は打欠き、上面はヘラミガキ、下面は丁寧なナデ。色調は純い黄橙色を呈す。胎土は1mm内外白色砂粒を含む。

SX04 (Fig.6・9, PL.3)

調査区北西側で検出した舌状を呈す浅い落込み。削平により残りは不良。確認規模は長軸長4.5m、短軸幅2.4m、深さは最大で6cmほどを測る。埋土は黒褐色粘質土で黄褐色のロームブロックなどを混入する。底面は凹凸があり汚れている。

出土遺物 弥生時代中期の土器、古墳時代~古代の土師器などが出でたが、細片が多い。39は古代末頃の土師器皿。復元口径12.8cm、器高1.9cmを測る。器表は摩滅し調整は不明。色調は純い橙色を呈し、胎土は精良。焼成はやや不良。

SX09 (Fig.9, PL.5)

調査区東隅で検出した石垣遺構。表土掘削の時一部崩してしまったが、胴木の上に四角い花崗岩の

切石を石垣状に積み上げていた。

出土遺物 近世後期以降の陶磁器が多いが、弥生土器などの古い遺物も混入している。40は肥前磁器V期（19世紀後半）の白磁の仏花瓶底部。素地は灰白色で、外面には光沢を持つ透明釉がかかる。

表探遺物（Fig.9、PL.6）

41は管状の土錘。一端を欠くが、長さ4.3cm、最大径は1.2~1.3cm、孔径0.4cmを測る。ナデ、指押え調整である。色調は橙色を呈し、胎土は精良。焼成は良好。

3.まとめ

調査区は区画整理などで高所部が削平をうけているためか遺構は少なかった。南側に浅い谷部があり、その斜面上に包含層が堆積するが、遺物はそれほど多く含まれておらず、比恵遺跡としては遺構の薄い地区であったものと考える。遺構の時期はSK02がもっとも古く、弥生時代前期板付II B式の墳である。SK07は弥生時代中期後半のものと古墳時代前期初頭のものを含む廃棄物処理土坑と考える。SD10は出土須恵器から8世紀前半代の墳と考えるが、同溝のつながりは不明。SX09は切石を積み上げた近世の石垣状の遺構である。谷部の湧水がある地点に築かれていることから水を蓄える溜め池のような施設と考える。

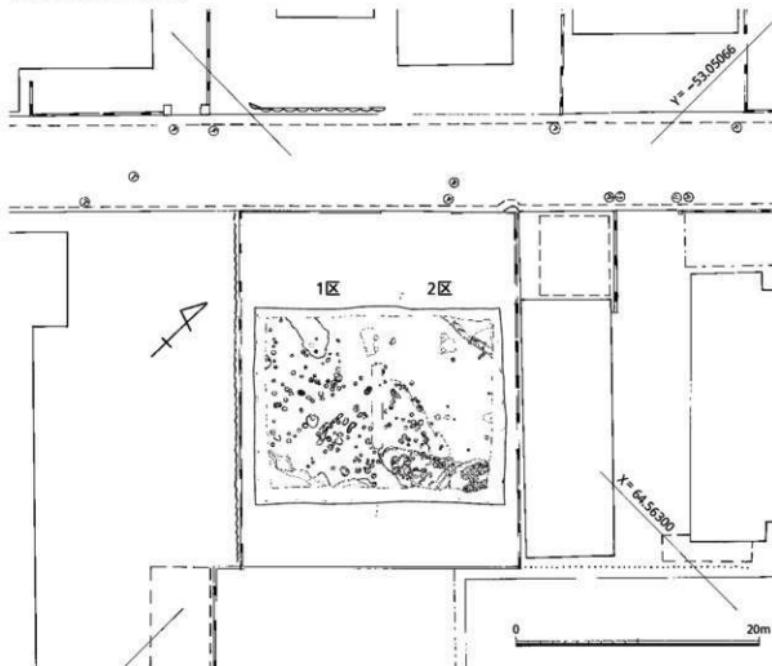


Fig.11 調査区周辺地形図(1/400)(本市道路台帳を基に作成。
座標は旧国土座標系を使用)

図 版



調査作業風景



(1) 第116次調査区（南西から）



(2) 第1区全景（北西から）



(1) 第2区全景（北西から）



(2) SD10（西から）



(1) SK02 (北西から)



(2) SX04 (北西から)



(1) SK07 (北から)



(2) 同 完掘状況 (東から)



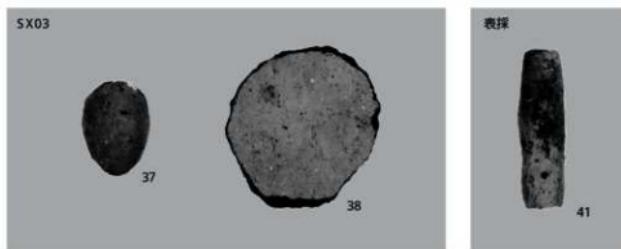
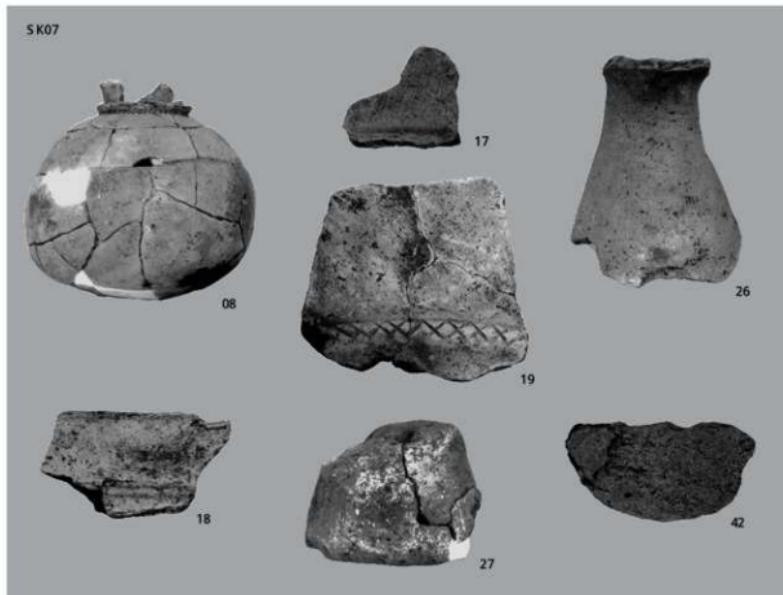
(1) SK07遺物出土状況（西から）



(2) SX09（南東から）



(3) SX03谷部西壁土層（北東から）



各遺構出土遺物（縮尺不統一）

報告書抄録

ふりがな	ひえ						
書名	比恵59						
副書名	比恵遺跡群第116次調査報告						
巻次	59						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1098						
編著者名	山崎龍雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810- 8621福岡市中央区天神1丁目8- 1 TEL092- 711- 4667						
発行年月日	西暦2010年3月23日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
比恵遺跡群 第116次調査	福岡市博多区博多駅 南4丁目180番4	40130 0127	33度 34分 50秒	130度 25分 43秒	20080707 ~ 20080731	327	事務所
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群 第116次調査	集落・ 包含層	弥生時代、 古代、近世	包含層、土坑、溝	弥生土器 + 古墳時 代土器 + 古代土 器・須恵器			
要約	調査区は北から南へ傾斜する地形であり、北側高所部は削平を受け遺構は残りは悪かった。南側も包含層が堆積していたが、遺構は土坑やピットなどで検出数は少なかった。もともと遺構の薄い地区であったのであろう。						

比 恵 59

—比恵遺跡群第116次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1098集

2010年(平成22年)3月23日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

(092) 711- 4667

印刷 (株)大里印刷センター

福岡市東区二又漸新町12-29

(092) 611- 3118

